

操作変数法 2 : 同時性と需要供給分析への 応用

講師 : 遠山祐太

最終更新 : 2024-12-01

はじめに

同時性

- 同時性 (simultaneity) : 被説明変数と説明変数が同時に決定される。
- 授業の流れ：
 1. 同時性と操作変数による解決方法：需要・供給推定の例
 2. Rでの実践例：需要関数の推定
 3. 不完全競争への拡張

同時性

同時性（逆因果）

- 説明変数と被説明変数が同時に決定される。
- 需要・供給曲線を例に考えていこう。

需要・供給曲線

- 市場 i における需要曲線

$$q_i^d = \beta_0^d + \beta_1^d p_i + \beta_2^d I_i + u_i^d$$

- q_i^d : 需要量, p_i : 価格、
- I_i : 平均所得(需要要因), u_i^d : 観察されない需要ショック(誤差項)

- 供給曲線

$$q_i^s = \beta_0^s + \beta_1^s p_i + \beta_2^s z_i + u_i^s$$

- z_i : 原材料価格 (費用要因), u_i^s : 供給ショック(誤差項)
- 完全競争のFOC $p_i = mc_i$ を考え、 $mc_i = \pi_0 + \pi_1 q_i^s + \pi_2 z_i + u_i$ を変形すると上のような供給曲線が得られる。

市場均衡

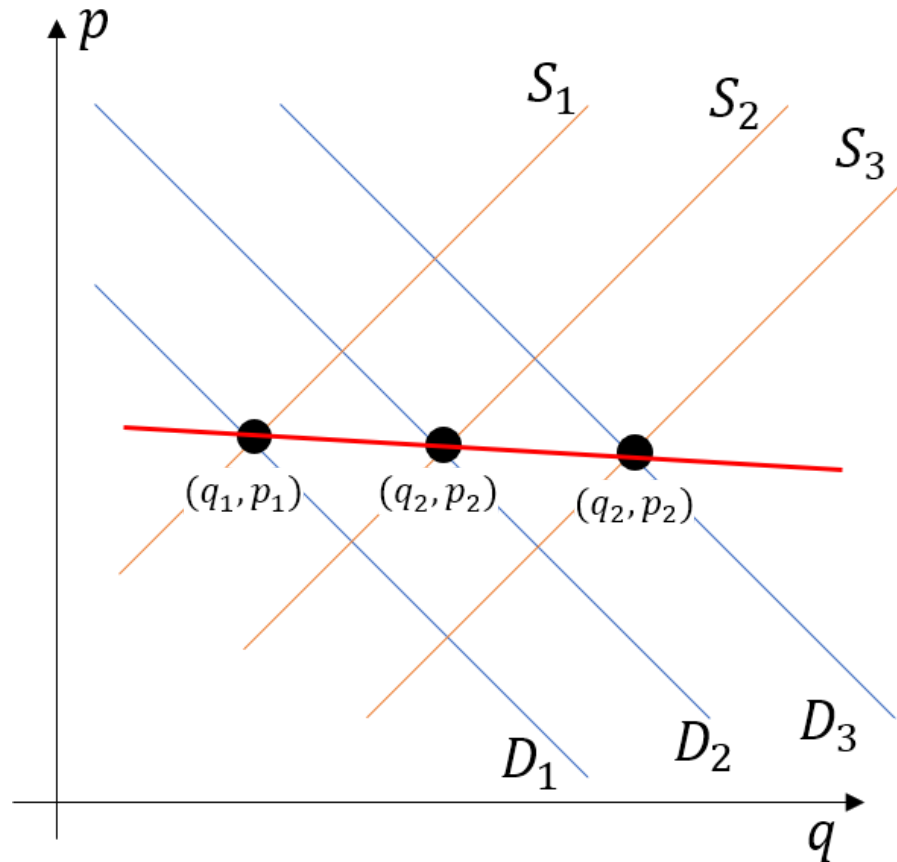
- 市場均衡における価格と数量は、 $q_i^d = q_i^s$ (需給の一致)により決定される。
- データ： $\{q_i, p_i, I_i, z_i\}_{i=1}^N$
- この例では均衡価格が

$$p_i = \frac{(\beta_2^s z_i - \beta_2^d I_i) + (\beta_0^s - \beta_0^d) + (u_i^s - u_i^d)}{\beta_1^d - \beta_1^s}$$

となり、価格と誤差項は必ず相関する。

図示：需要と供給は分離できるだろうか

- ポイント：観測されるデータ点は需要曲線と供給曲線の交点である。



操作変数による解決

- 需要関数から考えよう

$$q_i^d = \beta_0^d + \beta_1^d p_i + \beta_2^d I_i + u_i^d$$

- 需要関数の推定のためには、 z_i を操作変数として用いる。
- 関連性： z_i が費用要因である限りOK。
- 独立性： z_i が需要要因と独立であればOK。

識別の直観：図示

- 費用要因 z_i によって引き起こされる 価格 p_i の変化に着目すれば、背後にある需要曲線を浮き彫り出すことができる。

需要曲線の推定

はじめに：パッケージの読み込み

```
library(summarytools)
library(tidyverse)
library(fixest)
library(AER)
```

例：煙草の需要推定

- 煙草の需要推定
 - 喫煙は多くの病気や負の外部性へとつながる。
 - たばこ税をサポートする一つの考え方
- 問い：煙草の消費を一定量削減するために、どれだけ課税すればよいか？
 - **煙草需要の価格弾力性**を知る必要がある。

データ：米国の州レベルパネルデータ(1985・1995年)

- AER パッケージの `CigarettesSW` データセットを用いる。

```
# データセットの読み込みと概観
data("CigarettesSW")
desc_stat <- descr(CigarettesSW,
                  stats = c("mean", "sd", "min", "med", "max"),
                  transpose = T)
```

記述統計

```
print(desc_stat)
```

```
## Non-numerical variable(s) ignored: state, year
```

```
## Descriptive Statistics
```

```
## CigarettesSW
```

```
## N: 96
```

```
##
```

```
##           Mean           Std.Dev           Min           Median           Max
## -----
##          cpi           1.30           0.23           1.08           1.30           1.52
##        income  99878735.74  120541138.18  6887097.00  61661644.00  771470144.00
##          packs           109.18           25.87           49.27           110.16           197.99
##    population  5168866.32   5442344.66   478447.00   3697471.50   31493524.00
##          price           143.45           43.89           84.97           137.72           240.85
##           tax           42.68           16.14           18.00           37.00           99.00
##          taxes           48.33           19.33           21.27           41.05           112.63
```

需要モデル

- 次のモデルを考える。

$$\log(Q_{it}) = \beta_0 + \beta_1 \log(P_{it}) + \beta_2 \log(\text{income}_{it}) + u_i + e_{it}$$

- Q_{it} : 州 i の t 期における、一人当たりの箱の量
 - P_{it} : 一箱あたりの税込価格
 - income_{it} : 一人当たりの所得（需要を変化させる）
- 価格の操作変数として、次を用いる。
 - SalesTax_{it} : 煙草にかかる税のうち消費税の割合
 - CigTax_{it} : 煙草に特別にかかる税
 - 関連性：税込価格に含まれる
 - 外生性：需要に直接影響しない（価格を通じて間接的に関わる）

データの抽出

```
Cigdata <- CigarettesSW %>%  
  mutate( rincome = (income / population) / cpi ) %>%  
  mutate( rprice = price / cpi ) %>%  
  mutate( saletax = (taxs - tax) / cpi ) %>%  
  mutate( cigtax = tax/cpi )
```

回帰の実行 (固定効果なし)

最小二乗法

```
cig_OLS <- feols(log(packs) ~ log(rprice) + log(rincome) | 0,  
                se = "hetero",  
                data = Cigdata)
```

操作変数法

```
cig_IV <- feols(log(packs) ~ log(rincome) | 0 | log(rprice) ~ salestax + cigtax,  
               se = "hetero",  
               data = Cigdata)
```

変数名を揃える

```
rownames(cig_IV$coeftable)[2] <- "log(rprice)"
```

結果の表示

```
cigres <- list()  
cigres[["OLS"]] <- cig_OLS  
cigres[["IV"]] <- cig_IV  
  
result_cigres <- etable(cigres,  
                        signifCode = NA,  
                        fitstat = c("r2", "n", "ivwald" ),  
                        digits = 2,  
                        digits_stats = 2)
```

推定結果

```
print(result_cigres)
```

```
##                               OLS                               IV
## Dependent Var.:              log(packs)              log(packs)
##
## Constant                      10.1*** (0.50)    9.7*** (0.51)
## log(rprice)                   -1.3*** (0.15)   -1.2*** (0.15)
## log(rincome)                   0.32* (0.15)    0.26. (0.15)
## -----
## S.E. type                      Heterosk.-rob.  Heterosk.-rob.
## R2                             0.55              0.55
## Observations                    96              96
## Wald (1st stage), log(rprice)   --              139.4
## ---
## Signif. codes:  0 '***' 0.001 '**' 0.01 '*' 0.05 '.' 0.1 ' ' 1
```

1st stage

```
# F 検定  
fitstat(cig_IV, "ivwald")
```

```
## Wald (1st stage), log(rprice): stat = 139.4, p < 2.2e-16, on 2 and 92 DoF, VCOV: Heteroskedasticity-rob
```

固定効果ありバージョン

最小二乗法

```
result_1 <- feols(log(packs) ~ log(rprice) + log(rincome) | 0,  
                 cluster = "state",  
                 data = Cigdata)
```

州の固定効果

```
result_2 <- feols(log(packs) ~ log(rprice) + log(rincome) | state,  
                 cluster = "state",  
                 data = Cigdata)
```

固定効果なし操作変数法

```
result_3 <- feols(log(packs) ~ log(rincome) | 0 | log(rprice) ~ salestax + cigtax,  
                 cluster = "state",  
                 data = Cigdata)
```

固定効果あり操作変数法

```
result_4 <- feols(log(packs) ~ log(rincome) | state | log(rprice) ~ salestax + cigtax,  
                 cluster = "state",  
                 data = Cigdata)
```

```
# 名前を揃える
models <- list()
models[["OLS"]] <- result_1
models[["state FE"]] <- result_2
models[["IV & no FE"]] <- result_3
models[["IV & FE"]] <- result_4

result_cig_panel <- etable(models,
                           signifCode = NA,
                           fitstat = c("r2", "n", "ivwald" ),
                           digits = 2,
                           digits.stats = 2)
```

推定結果

```
print(result_cig_panel)
```

```
##                               OLS           state FE           IV & no FE
## Dependent Var.:           log(packs)       log(packs)       log(packs)
##
## Constant                   10.1*** (0.46)                               9.7*** (0.56)
## log(rprice)                -1.3*** (0.17) -1.2*** (0.14) -1.2*** (0.18)
## log(rincome)                0.32 (0.21)   0.12 (0.22)   0.26 (0.20)
## Fixed-Effects:           -----
## state                       No                       Yes                       No
## -----
## S.E.: Clustered           by: state           by: state           by: state
## R2                          0.55                0.97                0.55
## Observations                96                  96                  96
## Wald (1st stage), log(rprice)  --                  --                  237.1
##
##                               IV & FE
## Dependent Var.:           log(packs)
##
## Constant
## log(rprice)                -1.3*** (0.16)
## log(rincome)                0.20 (0.24)
```

需要・供給分析の拡張

需要・供給分析の拡張

- 先に導入した需要・供給分析は以下の2つを仮定
 - 同質財 -> 差別化財は今後の授業で(離散選択モデル)
 - 完全競争
- 不完全競争を考慮したケースへの拡張を考えよう。
- 特に、クールノーモデルを用いた実証分析を考える。
 - モデルの導入
 - 需要関数の推定
 - 限界費用の推定

クールノーモデル(の復習)

- N 企業存在する市場を考える。企業のインデックスを i とする。
- 企業 i の利潤

$$\pi_i = P(Q)q_i - C_i(q_i)$$

- $P(Q)$: 逆需要関数、 $Q = \sum_{i=1}^N q_i$
 - $C_i(q_i)$: 総費用, q_i : 生産量
- ナッシュ均衡を考えよう。

一階条件とナッシュ均衡

- 各企業の最適生産量に関する一階条件は

$$P(Q) - MC_i(q_i) + q_i \frac{\partial P}{\partial Q} = 0$$

- この式を q_i について解くことで、各企業の最適反応が求められる。
- 一階条件を N 企業について連立させて $\{q_i\}_{i=1}^N$ を解くことでナッシュ均衡の生産量が求まる。
- 解き方については後述（数値計算）

推定

- 推定したいもの：
 - 需要関数 $Q(P)$ (もしくは逆需要関数 $P(Q)$)
 - 費用関数 $C_i(q_i)$ ないし、 限界費用関数 $MC_i(q_i)$
- 需要関数の推定は前と同様。
 - 操作変数が必要。 費用関数に入るであろう費用要因をIVとして用いる。
- 費用関数の推定は 一階条件を用いる。

限界費用関数の推定

- 一階条件を書き換えると

$$MC_i = P(Q) + q_i \frac{\partial P}{\partial Q}$$

- 右辺については、需要関数を推定すれば、全て計算可能。
- 需要関数の情報に基づいて、「実現した限界費用の値」が推定できる。
- もし限界費用が一定(収穫一定の技術)を仮定すればこれで終わり。
- 限界費用が生産量に応じて変化するのであれば、限界費用関数を推定する。

$$MC_i(q_i) = \gamma_0 + \gamma_1 q_i + \gamma_2 z_i + u_i^s$$

- 注：要操作変数

推定したモデルを用いたシミュレーション分析

- クールノーモデルの要素(需要・供給)が揃うと、様々なシミュレーション分析が可能！
 - 税金・補助金を導入したらどうなるか？
 - 企業が技術革新をして費用が下がったらどうなるか？
 - 企業が合併したらどうなるか？
- シミュレーション分析のためには、ナッシュ均衡を計算する必要がある。
 - 次のスライド

ナッシュ均衡の数値計算

- 各企業の最適生産量に関する一階条件は

$$P(Q) - MC_i(q_i) + q_i \frac{\partial P(Q)}{\partial Q} = 0$$

であり、これを $i = 1, \dots, N$ まで並べた連立方程式を (q_1, \dots, q_N) について解く。

- 解き方の例：

1. 初期値として解の候補をセットする: $\{q_1^{(0)}, \dots, q_N^{(0)}\}$
2. 現在の解の候補から $Q^{(0)} = \sum_{i=1}^N q_i^{(0)}$ を計算し、これを一階条件の Q に代入する。すると、 q_i が求まる。これを $q_i^{(1)}$ と呼ぶ。
3. 新しく $Q^{(1)}$ を計算し、同じ手順を繰り返す。
4. 最終的に $\{q_1^{(r)}, \dots, q_N^{(r)}\}$ が変化しなくなった時点で計算を止める。その点がナッシュ均衡となる。